

追憶 林文子先生

追 憶

今井田 二三子

林さん（健康文化初代理事長）が、研究テーマの完結のため指導教授の玉木先生を追って長崎大学に移って、どれくらい経過した頃でしょうか

久しぶりに受けた電話に研究完結の知らせではと思い、受話器を取った私の耳に入った言葉は「私、洗礼を受けたの」でした。

青空から突然降り始めた雹に頭を打たれたような思いで我が耳を疑い、聞き返そうとしたが思い止まりました。私の心の何処かに鎮くものがあったのかもしれない。何か言わなければと思い、言う言葉が見当たらず、しばらく受話器を持ったままでした。

しばらくして教会で静かに祈りを捧げる林さんの姿を思い浮かべ、何かホッとする思いがしたのを否めません。

林さんは何時も語ることはありませんでしたが、激動の歳月を折りにつけ感じていた私は、穏やかで静かな時が訪れるのを心の何処かで喜び、そして岐阜を離れてから会うたびに厳しくなってゆく表情に、往年の涼しげで爽やかな笑顔が返るのを期待しました。

しかし、穏やかで静かな日々ではなく、次の電話は名大病院勤務、次が聖路加病院、そしてまた名大病院と、十年一日のごとく同じ場所で同じような日常を過ごしている私を驚かせる知らせが、次々とありました。

林さんは困っている人が目に入ると、私を始めどの人も精魂込めて援助、介助をする強い思いやりの心を持っていました。その一つとして退職後は、私財を投げだして何かをするのだと告げられ、健康文化財団法人をたち上げ健康に対しての活動、また経済的に困っている学生さんの援助をするのだとも告げられ、その意志と実践力には只々、目を見張る思いでした。

そして或る日の電話で例の淡々とした調子で、「腸の状態が良くないの」と告げられ、次は入院の電話を受けました。

「何処の病院に入院、行くよ」という私の言葉に電話の声は「あなたがきてもどうということはないから、いいよ」でした。

信頼する主治医の先生と弟さんが付いておられるから、私ごときは足手まと

いになると思い止まりましたが、しかし経過と退院の知らせをジリジリする思いで待ちました。

退院の知らせを受け一先ずホッとしましたが、状態不明のまま私の心は揺れ動いていました。

その様な時、信仰を持つ林さんは祈っているだろう、ならば私も祈ろう、特定の神を持たない私は、想定 of 万能の神に祈りを捧げようと心に決めました。

その後、どれ位の月日が過ぎたでしょうか、或る日林さんから小さい包みが届けられました。包みを開けて私が目にしたのは、何時の頃からか林さんの指に目にしていた指輪でした。「これを、あなたに」と短い文が添えられていましたが私は林さんの今の心をそのまま手にした思いで思わず指輪を握りしめて「生きてっ、生きてよっ」と心の中で叫びました。

林さんの訃報の電話を弟さんから受け、夜の診療を早々に打ち切り、教会へ駆けつけました。教会にはすでに人影はなく、淡い光に包まれて総てを慈しみ抱かれるように両腕をひろげられたマリア様の像に抱かれるように、林さんの棺は置かれていました。

静か、現実の世界と感じられないような静けさ、私はマリア様に抱かれた林さんの顔に、あの涼しげで爽やかな笑顔が浮かんでいるように思いました。

私が願っていたあの笑顔が。

(内科医)